

臨終における光明表現再考

神居 文彰

鳳凰堂中堂・天蓋蛇骨子の漆塗膜に、未知の用材技法の使用が調査担当の岡田文男氏報告より判明した(二〇〇九・〇三・一二)。すなわち、含入辰砂が七〇ミクロンという当時漆器などに使用されていた粒子の二倍以上であることや、その半分の大きさで琥珀・銀・孔雀石などの鉱石が微量に混入されていたのである。当時筆者は、「発色とは異なる目に見えない部分にまで微細な物を封入する行為は、莊嚴の意味を再考し、日本人の繊細で玄妙な精神性を確認出来る。」とコメントしたが、仏典に基づく表現であり内なる極楽浄土として「まばゆい光の世界」とした岡田氏の指摘は深い意味をもつ。

光明に照らされることで「無_ニ所_ノ障礙_ニ」(『阿弥陀經』)などと經典に威徳が示され、「臨_ニ命終時_ニ、見_ニ三種明_ニ」や「臨終見_ニ於日輪_ニ」(『臨終行儀注記』)など臨終時の光明への希求が多出するが、肉眼では見えない内深部に光明の表現を調えているという真義である。

臨終の場の設えとして臨終行儀類書には、「自受_レ病日_{ヨリ}常_ニ以_ニ淨麻油_ヲ奉_レ獻_ニ仏並搭寺_ニ事_ニ」(同)と灯明を灯すことが記されるものの、むしろ「西晴れて日の光りのさし入たる所にて」など自然光を求め、各種往生伝や絵巻類などからは、瑞光の識認や光線への享受感覚ともいえる五色幡を執ることが描かれ、

あくまで人工の灯火は、「懸_レ幡燃_レ火」と幡と一具で準用され、近世をむかえ「壇内四ツノ角ニ灯火ヲ挑グベシ。仏ニ灯燭ヲ上ツレバ、命終ノ時、光明ヲ見ル。」(『臨終節要』)という段階まで強調されることは少ない。

鳳凰堂の創建期に近いと筆者が推定する仏後壁(二〇〇九・〇一・二六発表)に描かれる蓮弁と近年発掘され発芽に成功した平等院蓮とは特徴が類似することから、堂内における写実的な描写の存在が指摘される。そこで様々に彩られる赤系に使用された赤色顔料は、辰砂だけである。素材の持つ意味が充分吟味されたのであろう。その上で金色である截金については、多様な変化を誘発することが移動照射実験により実証出来た。やまと絵最古の実物資料である国宝扉絵は、中心画題である季節の推移と仏教的意味づけが従来より指摘されるが、闇維ののち「兼占_ニ勝地_ニ」(『定起請』)とする自然景觀への意嚮と連関し、救済の絶対軸を自然により感知する日本の宗教的空間受容が、変化を媒体として巧妙に組み合わせられていくと解されよう。

救済主である仏の表情がとりわけ人に似ている必要はない。鳳凰堂の国宝本尊阿弥陀如来の眼差しは、強い意志を持ったより人間的なものというより、無縁の慈悲を差し向ける極限を超えた、捉えどころのない茫洋とした表現である。像全体として抑揚の少なさは、光明の圧倒的で万全な強さを表現するのに適していると指摘される。本来見ることの難しい対象をあえて表現した、光明そのものを救済主と見立てる意匠である。この点は、胎内月輪とあわせて考えたい。

堂内の鏡の問題などもあるが、堂内のグラデーションや縹緗

第8部会

の段数の変化による遠近感と奥行き、さらに螺鈿などの反射による光彩の多様な装飾性、朝夕等の自然の運行と季節感、和様として強調される柔らかさというより、変化にこそ重要な意味を与えた結果ではないか。垂直軸と水平軸が注目されるが、さらに目に見えることのない物質の内面から放射するものを意図した荘嚴の完備という意味をもつ。見える見えないかが問題ではないということは、光明自体の理解も、より確実な救済の強い確信というのみならず、むしろ見えないもの、臆気なもの、変化し不安定ともいえる光芒に、実生活と目に見えない世界をつなぐ豊饒な緩衝体としての役割をもたせ、移動することによりその表現が変転するシークエンス景観を超えた、見えない不完全なものに完全性を希求し、転変する光明を媒体として、あらゆる状況に適応可能な臨終場の設えと空間設置を進行したものと看取される。

存覚上人における来迎思想

平井 幸太郎

存覚上人の教学は、親鸞聖人の教えを善導大師・法然聖人の伝統を受け継ぐものであるとされている。多くの著作の中でも注目されるべきはやはり『浄土真要鈔』であろう。幾つか挙げられたテーマの中から今回は「来迎」について注目したい。方法としては、『浄土真要鈔』に至るまでの来迎思想の背景に言

及しつつ、最終的に存覚上人の来迎思想とは如何なるものであったのか、考察をしていく。

まず注目すべきは平安浄土教における来迎思想についてである。中でも源信和尚の『往生要集』は平安期の臨終来迎思想を取り上げたものとして焦点が当てられるべきであろう。『往生要集』では、基本的に臨終に正念を得ることによって来迎があるとされている。言い換えるならば、あくまで『往生要集』における臨終行儀を説かれる意義は、臨終正念を得るためである。その臨終正念によって臨終に来迎があるという考え方は、平安浄土教の来迎思想を端的に象徴したものである。

次に法然聖人・親鸞聖人の来迎思想についてである。鎌倉期に興った法然聖人の念仏の教えは、臨終中心（第十九願）から平生中心（第十八願）への移行とも言え、臨終来迎を特別視するのではない。『選択集』や『逆修説法』の中で、平生の光明摂護の後に臨終に来迎がある、という論旨の流れがある。あくまで平生における念仏を重視された法然聖人にとっては、来迎の意義自体に独自の思想が窺える。この法然聖人の流れを汲み、思想を構築されたのが親鸞聖人である。親鸞聖人は第十九願の行者が得られる利益としての臨終来迎（『末灯鈔』）と、法然聖人の来迎思想を平生の念仏者との関わりの中でより一層推し進めて捉えられている、言い換えれば他力としての来迎（『唯信鈔文意』）の二つの理解があると考えられる。親鸞聖人においては、他力としての来迎思想が特筆すべき点であると考えられる。

これらの日本における来迎思想の変遷を踏まえた上で、存覚